令和四年（二〇二二）三月二十五日発行
『大倉山論集』第六十八輯抜刷
（公益財団法人　大倉精神文化研究所）

井上円了の活動主義について

竹村牧男

井上円了の活動主義について

竹村牧男

目次

はじめに
一　創立者・井上円了　略年譜
二　井上円了の著作
三　井上円了の言葉から
（一）円了の哲学と仏教
（二）円了の活動主義
（三）人々のために生きる
（四）どこまでも積極的に生きる
（五）忍耐の重要性について
（六）人生七十、なお青年
おわりに

はじめに

皆さん、こんにちは。本日は、コロナ禍下にも関わらず、多くの方々がお集り下さり、まことに有り難うございました。

私の前に、透明なビニールシートがありますが、万一、飛沫がそれを越えていくと問題かもしれませんので、マスクを着用したままお話させていただきます。本当に、飛沫に負えないことだと存じます。

ご紹介にありましたように、私は昨年（二〇二〇年）三月末まで、およそ十年間ほど、東洋大学の学長を務めておりました。実はここ大倉精神文化研究所と東洋大学とは、深い関係にあります。この研究所を設立なされた大倉邦彦先生には、以前、東洋大学の学長を務めていただいたということがあるのです。昭和十二年七月から、昭和十八年六月まで、二期六年間、学長として東洋大学の発展に尽力してくださいました。それまで文学部一つの単科大学であったところ、社会科学系の学問も導入して新たに二学科を増設していただいたことは、後の総合大学への道を拓くものでした。大倉学長の時代に、学生数もかなり増加しました。

『東洋大学護国会会報』第十一号（昭和十八年十月）には、「大倉先生は就任以来六ヶ年、終に終始無俸給で奉任されたのである。のみならず、たびたび私財を本学の為に投じて、その額、実に十数万円の巨額に達しているのである。この二、三の事実の前にも、我々は先生の御深恩を終生わすれることは出来ない」とあると言います。

そのように、大倉邦彦先生は東洋大学の大恩人でありまして、したがってこの研究所とは、今後も緊密な関係を維持してまいりたいと思っております。

さて今日は、東洋大学の創立者井上円了のお話をさせていただきます。私が十年間も東洋大学の学長を務めたのは、

創立者の井上円了の人と思想に魅せられたから、と言っても過言ではありません。円了のどういうところが魅力かと言いますと、概略、次のようなことがあります。

一　民衆に対する教育の情熱の深さ。そのために、自ら属する宗門も出たこと。

二　哲学を踏まえた仏教の解明。智・情、理論・実践、実にバランスがとれている。

三　伝統を深く汲み、高度な日本仏教を広く海外へ輸出することを考えていた。

大倉邦彦先生も、円了の思想を高く評価されたと聞いております。大倉邦彦の思想と円了の思想の比較研究は、興味深い今後の課題でしょう。

本日は、本講演会の今期の統一テーマである、「こころを磨き、からだを鍛える」にちなみ、円了の「活動主義の思想」についてお話させていただきます。

一　創立者・井上円了　略年譜

まず、円了のごく簡単な略年譜を掲げておきましょう。以下のようです。

安政　五年（一八五八）　二月四日（新暦三月一八日）、越後国大谷派慈光寺の長男として誕生

明治　四年（一八七一）　東本願寺にて得度

明治一〇年（一八七七）　京都東本願寺の教師教校に入学

明治一一年（一八七八）　四月、東本願寺留学生として上京　九月、東京大学予備門に入学

明治一四年（一八八一）　九月、東京大学文学部哲学科に入学

明治一八年（一八八五）　**七月、東京大学文学部哲学科を卒業**

明治二〇年（一八八七）　**九月、哲学館を創立、麟祥院で開校式を挙行**

明治二一年（一八八八）　政教社が雑誌『日本人』を創刊、同社の創設に参加　**六月、欧米視察**

明治二二年（一八八九）　郷里の父からの帰郷の要望に対し、仏教の危機存亡の重大時局につき帰郷不能の手紙を出す

明治二三年（一八九〇）　哲学館専門科設立のため**全国巡講**を開始（二六年まで継続）

明治二六年（一八九三）　迷信打破のため妖怪研究会を設立

明治二九年（一八九六）　東洋大学設立と東洋図書館建設の旨趣を発表

第二回**全国巡講**開始（三五年まで）

明治三〇年（一八九七）　六月、『仏教哲学系統論』により文学博士の学位を受ける

明治三五年（一九〇二）　哲学館、現在の白山校地に移転

哲学館大学部開設を予告

一一月、欧米およびインドの教育事情視察のため外遊

明治三六年（一九〇三）　一二月、哲学館事件発生

修身教会設立趣意書を全国に配布　『広く同窓諸子に告ぐ』を発表

明治三七年（一九〇四）　四月、哲学館大学開校式を挙行、哲学館大学長に就任

哲学堂落成式を挙行し、四聖を祀る

明治三九年（一九〇六）　大学長を辞し名誉学長となる　哲学堂に退隠

四月、修身教会運動のため大正八年まで全国を巡講
六月、哲学館大学を私立東洋大学と改称

明治四四年（一九一一）　**オーストラリア、南アフリカ、北欧、南欧、南米等の視察**
大正　二年（一九一三）　哲学堂の講堂落成
大正　六年（一九一七）　東洋大学創立三〇周年記念式典、記念講演
大正　八年（一九一九）　六月、大連で逝去

このように、円了は長岡地方のお寺に生まれ、その後、東京大学で哲学を学び、明治二〇年に私立哲学館を創設して哲学をベースにした教育活動を展開し、その後、明治三九年、哲学館大学を辞して以降、生涯、全国を講演して回り、社会教育に挺身しました。大正八年、大連での講演の際に身体の不調をきたし、そのまま亡くなりました。

特筆すべきは、あの当時に三たび、海外視察旅行に出ていることです。明治二一年、明治三五年、明治四四年の三回です。いずれも一年近くの旅で、三回目は、主に南半球を回っており、円了は実に地球のすみずみまで旅行していたのです。しかしその視察によって、西洋かぶれになるのではなく、むしろ日本の伝統思想、芸術、文化を守らなければならない、日本の大乗仏教を世界に知らしめなければならない、と考えるのでした。

また、国内の講演旅行は三期にわたって行っていますが、哲学館大学退任後だけでも、五千回はゆうに超えています。民衆の一人ひとりの知性の向上に、生涯それこそ奮闘してやまなかったのでした。

二　井上円了の著作

次に、円了は学生時代から執筆活動を行い、生涯におびただしいほどの著作を公刊していますが、その中、主なものを挙げてみますと、次のようです。

『真理金針』『仏教活論序論』『仏教活論本論』『活仏教』
『哲学一夕話』『哲学要領』（前・後編）『純正哲学講義』『哲学早わかり』『哲学新案』
『仏教通観』『仏教大意』『大乗哲学』『仏教哲学』
『日本仏教』『真宗哲学序論』『禅宗哲学序論』『日宗哲学序論』
『外道哲学』『インド哲学綱要』
『宗教新論』『比較宗教学』『宗教学講義』『宗教哲学』
『倫理通論』『倫理摘要』『日本倫理学案』
『通信教授　心理学』『心理摘要』『東洋心理学』『仏教心理学』『心理療法』
『教育総論』『教育宗教関係論』
『妖怪学講義』『妖怪玄談』『星界想遊記』
『欧米各国政教日記』『南船北馬集』
『円了茶話』『甫水論集』『円了講話集』『奮闘哲学』

※『井上円了選集』全二五巻（学校法人東洋大学）

円了は哲学者、教育者として知られていると思いますが、このように、哲学関係の著作のみならず、仏教学はもち

ろん、宗教学、倫理学、心理学、教育学等にわたって、高度で先駆的な業績をあげているのです。さらにあらゆる学問を動員した、超学際的な、「妖怪学」の学問体系の樹立も果たしました。私は、円了は「近代日本の人文学の父」と言うべき存在であると思っております。円了のこうした一面を、ぜひ世の中の人々に知ってほしいと思っております。

なお、この『井上円了選集』全二五巻のすべては、東洋大学図書館のリポジトリにて公開されておりますので、ご関心のある方は、ぜひ覗いてみていただければと思います。

三　井上円了の言葉から

（一）円了の哲学と仏教

さて、これより円了の活動主義について、円了自身の言葉を基に探っていくことにしましょう。円了は少年のころから中国の古典の勉強をしていますが、子どもながらに儒教には何か求めるものが無いように感じたようです。その後、かの長岡洋学校に学び、キリスト教も学びますが、それも意にかなうものではありませんでした。かと言って、自分の生家のお寺の仏教については、何か胡散臭いものを感じていたようです。それでも、東本願寺の教師教校で英学生として学ぶことになり、そこから東京大学に派遣され、哲学科に学ぶことになります。その頃、東大の文科大学には、アーネスト・フェノロサがいて、西洋哲学を教えていました。また、『大乗起信論』を講じた原坦山、『八宗綱要』や『天台四教儀』を講じた吉谷覚寿もいて、ここで円了は東西の哲学を学ぶのです。そうした中、西洋哲学を学ぶ中で、特にヘーゲルの思想にいたく感銘を受け、そこに追い求めてきた真理があったと確信したのでした。翻って、

仏教の思想を顧みた時、そこにはヘーゲルの哲学と同等の思想があることを改めて発見したと言います。その、円了の思想形成の原点ともいうべき思いを述べた文章がありますので、それを読んでみたいと思います。

すでに哲学界内に真理の明月を発見して、更に顧みて他の旧来の諸教を見るに、ヤソ教の真理にあらざることいよいよ明らかにして、儒教の真理にあらざることまたたやすく証することを得たり。ひとり、仏教に至りては、その説、大いに哲理に合するを見る。余、ここにおいて再び仏典を閲し、ますますその説の真なるを知り、手を拍して喝采して曰く、何ぞ知らん、欧州数千年来、実究して得たるところの真理、早くすでに東洋三千年前の太古にありて備わるを。しかして余が幼時、その門にありて真理のその教中に存するを知らざりしは、当時余が学識に乏しくして、これを発見するの力なきによる。……これ実に明治十八年のことなり。これを余が仏教改良の紀年とす。（『仏教活論序論』、『井上円了選集』（以下、『選集』）第三巻、三三七頁）

このように、円了は西洋哲学が説く真理の立場から他の哲学・宗教等を見たとき、ひとり仏教のみはすでに同じ真理を説いていたと再認識できたというのです。このとき、円了は「手を拍して喝采し」たとあるように、大いに喜んだのでした。これは、明治十八年のこととされていますので、東大哲学科を卒業する年のことになります。以後、円了の精神的バックボーンは、哲学と仏教ということになったことでしょう。

では、円了はヘーゲル哲学の、どこを評価したのでしょうか。そのことは、次の文章に見ることができます。

すなわち絶対は相対を離れて別に存するに非ざるゆえんを知るべし。……つぎに西洋にありては、シェリング氏の哲学は相対の外に絶対を立つるをもって、ヘーゲル氏これを駁して相絶両対不離なるゆえんを証せり。今、仏教に立つるところのものはこの両対不離説にして、ヘーゲル氏の立つるところと少しも異なることなし。すなわち仏教にては、相対の万物のその体、真如の一理に外ならざるゆえんを論じて、万法是真如といい、真如の一理、

物心を離れて存せざるゆえんを論じて、真如是万法といい、あるいはまた、真如と万物と同体不離なるゆえんを論じて、万法是真如・真如是万法、色即是空・空即是色という。（『真理金針』〔続々編〕、『選集』第三巻、三〇四～三〇五頁）

このように、ヘーゲルは「相絶両対不離なるゆえんを証」したと言っています。つまり、相対と絶対、現象と実在とが不離同体であることを論理的に立証していると理解したのです。そこに円了は哲学の究極の立場を見たのでした。

この立場からあらためて仏教の思想を見たとき、同様に「万法是真如・真如是万法」と説いていることを見出します。それは、主に天台の教理に説かれていることです。その代表として、『摩訶止観』には、「一色一香、無非中道」、一つの色（視覚の対象）一つの香（嗅覚の対象）も、中道に非ざるは無しとあります。これは、現象はそのまま絶対であるという意味になります。「色即是空・空即是色」と同じことになります。この「空」は空性のことであって、それは諸法の本性としての法性、そして真如と変わるものではありません。こうして、ヘーゲルの哲学と仏教の間に共通の思想を見出し、仏教の卓越性をあらためて再評価し、幕末から明治維新にかけて疲弊していた仏教の復興、再興に全霊をもって活動していくのでした。

（二）円了の活動主義

その円了の思想は、やがて「活動主義」に帰着していきます。このことを、次の文章に見ることができます。

余は従来、古今東西の哲学者の諸論もその大要だけ一通り研究し、その帰するところ人生の目的は活動に外ならぬと自得し、哲学の目的も人生を向上するに外ならぬと知るし、爾来活動主義をとりて、今日に至るものである。活動はこれ天の理なり、勇進はこれ天の意なり、奮闘はこれ天の命なり。

これが余の主義である。すなわち吾人の天職はこの活動によりて、人生を向上せしむるにありと自信している。しかしてその向上は一身より始めて一国に及ぼし、一国より世界に及ぼすをもって順序を得たるものとし、何人も国家のために尽瘁せよと唱えている。（『奮闘哲学』、『選集』第二巻、四四二～四四三頁）

ここで円了は古今東西の哲学の大要のみひととおり研究したとありますが、それは謙遜の辞でしょう。大いに東西の哲学を学ぶ中で、最終的に「活動主義」に至ったのだと明確に述べています。その心を、「活動はこれ天の理なり、勇進はこれ天の意なり、奮闘はこれ天の命なり」という句に表現しています。何か元気が出る句ですね。最後に、「何人も国家のために尽瘁せよ」とあるのは、当時の時勢が反映しているもので、今日においては、「何人も地球社会のために尽瘁せよ」と読み替えるべきでしょう。

円了の最晩年の随筆集に『奮闘哲学』という本がありますが、その題名はこの「奮闘はこれ天の命なり」から取られたものと思います。後年、日本全国どこにでも出かけて講演してやまなかった生き方は、まさに奮闘そのものでした。「奮闘」は、円了の代名詞と言ってもよいでしょう。

では、この「活動主義」の背景には、どのような思想があったのでしょうか。そのことを物語るものとして、次の言葉があります。

見よ鳥は飛び魚は泳ぎ、水は流れ雲は動くではないか。これみな無字の経、不文の教えではないか。これを一括していわば、物みな活動しているではないか。しからば吾人もまた活動すべきが当然である。しかして活動はなんによって起こるかというに、宇宙の内部に潜在せる大勢力の発動である。この勢力によって世界が循化するに至る。しかしてその勢力の至純なるものが吾人の精神内に伝わり、わが生来固有せる先天の良心となりて、われに命令を与うるに至る。故に外に万物の活動を見、内に良心の命令に聴かば、人生の目的おのずから判明し、己

の力のあらん限りを尽くして、向上活動すべきものなるを自覚するに至る。（同前、二五五～二五六頁）

経典は言葉で真理を表現しているものですが、鳥・魚、水・雲等、自然は言葉によらず、その姿・あり方そのもので真理を語っています。その要点は、「物みな活動している」ということです。その真実からすれば、自分もまた活動すべきであると言うのです。この考え方は、おそらく『易経』の、「天行、健やかなり、君子、以て自ら彊（つと）めて息（や）まず」から来ているのでしょう。宇宙の活動は一瞬の間も無く進行している。君子たる者はそのことに感じ入って、自ら努め励んでやまないものだ、というのです。その根本を、円了は「宇宙の内部に潜在せる大勢力の発動」と表現しています。いずれにしても、自己と宇宙にはたらいている大いなる力に乗託して、「己の力のあらん限りを尽くして、向上活動すべき」なのだと言っています。この「自彊不息」こそが、円了の人生観の根本にあるものでしょう。

なお、どんなことでも、ただ頑張ればそれでよいということではありません。円了は、「この活動奮闘によりて、人生を向上せしむるには、道徳を根底としなければならぬ。ずいぶん世間に乱奮闘、暴活動がある。故に人生の目的は道徳的活動、すなわち良心の指導の下に活動するものであることも、前にしばしば述べておいた」（同前、四四三頁）とも言っています。悪の実行にかかる「乱奮闘、暴活動」であってはなりません。勇進・奮闘は、あくまでも「良心の指導の下に活動するもの」でなければならないことは、言うまでもないことです。

（三）人々のために生きる

また、円了はその活動主義の実践の場を、具体的な現実社会に求めていました。人々のために活動するのでなくては、意味がないと考えていたのです。そのことを、向上門と向下門の併置という仕方で説いています。次のようです。

哲学は物心相対の境遇より絶対の真際に論到する学とするは、哲学の向上門である。この向上門の外に更に絶対

の域より相対界へ論下する一道があるが、これを仮に向下門と名付けておく。すなわち哲学の応用の方面である。もとより宗教にも向下門あれど、哲学とややその趣を異にしている。もし哲学に向上のみありて、向下なきときは、ただ学者が己の知欲を満たすまでの学となり、世道人心の上になんら益するところなきに至り、畢竟無用の長物たるを免れぬ。よって哲学には必ず向上向下の二門を併置しておかねばならぬ。（同前、一三二頁）

ふつう哲学というと、存在や時間や認識や言語等、その本質をどこまでも探っていく深遠な学問のように思われています。「絶対の真際」とは、「絶対という真実のきわみ」と言うことでしょう。それを論究していくのが哲学だと思われるのですが、その絶対の域から現実の具体的な世界に降りてきてそのあり方を論じていく、さらにはその理念を実践していくことも、哲学という学問そのものに必要なことであると言うのです。ただ真理を求めて探究していくのみでは、単なる自己満足に過ぎず、意味がないと断言しています。したがって、哲学には向上門と、そこで得た真理を具体的に社会に生かしていく向下門の両方が、必ず用意されてなければならないと言うのです。

ではここで、向上門と向下門との関係は、どのように考えられるべきでしょうか。このことについて、円了は非常に鋭い指摘を行っています。次のようです。

しかしあらゆる事情を離れて単に哲学そのものよりいえば、向上がその特性とするところにして、これに重きを置くべきものであろうも、もし更に進んでその向上はなんのためかと問わば、向下せんためなりと答えざるを得ない。すなわち向下せんための向上にして、向上門は方便、向下門は目的となるであろう。また現今にありて向上門は古来の説を反復するまでなれば、哲学の大本としては、余はすでにその理源を究め尽くせりと思う。故に余は近来もっぱら向下の一道に全力を注ぎつつある。（同前、一三五頁）

向上するのは、向下するためだと言うのです。向下門こそが目的で、向上門はその方便（手立て）だと言うのです。

この「向下せんための向上」という見方には、私も目からうろこが落ちる思いでした。このことは哲学だけのことではないと思います。およそ学問を遂行し、身に着けたら、それを社会に応用し生かしていくべきです。私はこのことを、「他者のために自己を磨く」という標語にして、学生たちに訴えてきました。

（四）どこまでも積極的に生きる

ともあれ、円了は哲学に従事する者は、ただ書物を読む等に終始するのではなく、むしろ書物を離れて、現実世界の中で奮闘努力すべきだと説いています。このことを、円了自身が実践しています。円了は、哲学を学んできた自らの使命として、「一．哲学を通俗化すること　二．哲学を実行すること」を挙げ、その二について次のようなことを言っています。

次に第二の使命たる哲学を実行化することは、老後半生の事業にして明治三十九年退隠以後、これに取り掛かり、その中心は和田山哲学堂と定めている。西洋の哲学は理論一方に偏して実行方面を疎外せるありさまであるが、……しかるに余は哲学の極致は実行にありと信じ、向上門内に向下の一道を開達するをおのれの理想とし、哲学の定義を下して奮闘活動の哲学とし、これを実行上に実現せんことに、もっぱら工夫を凝らしている。しかしてこの点は西洋哲学の唱導せざるところなれば、余は教外別伝の哲学、西哲未発の新案と名づけておく。（「哲学上における余の使命」、竹村牧男監修『井上円了　妖怪玄談』、大東出版社、二〇一一年、二八二～二八三頁）

いわば、活動主義を実行することは、西洋未発の、教外別伝の哲学であるとも言っています。また、哲学を行おうとする人は、ただ活動すればそれでよいとまで言っています。このことについて、円了は法然の「一枚起請文」を替えて、次のように謳っています。

和漢西洋のもろもろの学者たちの沙汰し申さるる哲学の学にもあらず、また学問により諸家の書を読み尽くして唱うる哲学にもあらず。ただ忠君愛国のために奮闘尽瘁すれば、疑いなく人生の本務を尽くしうると心得て活動するほかには、別の子細候わず。ただし宇宙観、人生観などと申すことの候は、みな決定して奮闘尽瘁すれば人生の本務を尽くしうる内にこもり候なり。このほかに奥深きことを存ぜば、かえって哲学の本旨にはずれ、人生の目的にも違うべし。哲学を行わん人は、たとえ古今の哲学をことごとく学ばずとも、一文不知の愚鈍の身になり、……学者の振る舞いをせずして、ただひたすらに活動すべし。（『奮闘哲学』、『選集』第二巻、二八二～二八三頁）

法然の「一枚起請文」の原文は、インターネットなどでお調べいただけたらと思います。円了は結構ユーモアのある方でもあったのです。ここでも、「忠君愛国のために」の句は、「地球社会のあらゆる人々のために」というように今日の状況に於いて受け止めるべきでしょう。

すでに哲学の真理として、相対即絶対・絶対即相対、万法即尊如・真如即万法であったわけですが、この立場は、現実世界のただなかに真実なるもの、絶対なるものを見る、積極的な世界観でありました。そこを踏まえて活動主義に出てきているわけで、円了の人生観・世界観は、きわめて力強い、前向きのものとなることは自然のことです。今の「奮闘努力し」、「一向に活動すべし」との言葉は、その辺のことを如実に表しています。もう一つ、同じような改作の文章がありますので、それもご紹介しておきましょう。それは、蓮如の「白骨の御文章」と言われるもので、真宗では門徒さんがおなくなりになった時に唱えられるもので、実に無常感が深く漂う文章です。こちらは、ご参考までにまず原文をあげてみましょう。

それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、およそはかなきものは、この世の始中終、幻の如くなる一期なり。

されば未だ万歳の人身を受けたという事を聞かず。一生、過ぎ易し、今に至りて、誰か百年の形態を保つべきや。我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず、おくれ先だつ人は、本の雫・末の露よりも繁しといえり。されば、朝には紅顔ありて、夕べには白骨となれる身なり。すでに無常の風、来たりぬれば、即ち二の眼たちまちに閉じ、一の息ながく絶えぬれば、紅顔むなしく変じて桃李の装いを失いぬるときは、六親・眷属集まりて嘆き悲しめども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙となし果てぬれば、ただ白骨のみぞ残れり。あわれというもなかなかおろかなり。されば、人間のはかなき事は、老少不定のさかいなれば、誰の人も、早く後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏を深くたのみまいらせて、念仏申すべきものなり。あなかしこ　あなかしこ。

このもの悲しい哀切なる文章を、円了は「青年奮闘文」に仕立ててしまうのです。次のようです。

それ人間の盛んなる相をつらつら観ずるに、おおよそ楽しきものはこの世の始中終、極楽のごとくなる一期なり。さればいまだ地獄の苦しみを受けたりということを聞かず。一生送りやすし。今の世において誰か悲観の淵に沈むべきや。われや先、人や先、苦を厭わず、労を厭わず、互いに競うて働く人は、必ず福禄を招くといえり。されば朝には貧困ありて、夕には紳士となれる身なり。すでに成功の春来たりぬれば、すなわち艱難の氷とけて、観楽の花を開きぬれば、霜枯れもたちまち変じて桃李のよそおいをなしぬる時は、六親眷属集まりて、天に舞い地に踊るも、さらにその喜びを尽くすべからず。たとえ寿命窮まりてこの世を去るにおよびても、功名は千載の後にまで残るべし。うれしというもなかなかおろかなり。されば誰の人もはやく成功の一大事を心にかけて、己(おのれ)の力のあらん限りを尽くし、奮闘すべきものなり。あなかしこ　あなかしこ。（「青年奮闘文」、同前、三一六頁）

円了が人生にいかに前向きに立ち向かっていたかがわかるでしょう。

（五）忍耐の重要性について

さて、そのように人生において人々のために奮闘努力していると、何かと困難にぶつかったり、自分にはもうできないと悲観したりといったことが往々にしてあるかと思います。その時に必要なのは、忍耐の心です。円了は我々の人生において、忍耐がいかに重要であるかを、随所に説いています。たとえば、次のようにあります。

つぎに自彊不息（自らつとめてやまず）は公徳と私徳とを問わず、文と武とを論ぜず、すべての事業に共通せる要素である。これを言い換えれば忍耐となる。そもそも忍の字は心が刃をいただきたる形なれば、余は心が武装しているのでありとし、戦時には身に武装をつけ、平時には心に武装をつけなければならぬ。しかしてその平時の武装は忍耐の刀である。これを心に着け、百難を排して勇進活動すべきものと思う。（同前、三三五～三三六頁）

忍耐の忍の字は、心に刃をいただいている形で、心の武装を意味している。つまり心に忍耐の刀を擁して、どんなに困難なことがあっても、その困難を乗り越えて、「百難を排して勇進活動すべき」だと言うのです。ここに、「自彊不息」を「言い換えれば忍耐となる」とあります。奮闘努力に忍耐はつきものなのです。そのことはよく了解しておいて、人生に取り組むべきでしょう。よく「ならぬ堪忍、するが堪忍」とも言います。少々苦しいことを我慢して事に対処していくのは当然のことであり、それはまだ忍耐とは言えないのかもしれません。もう我慢できないということを、なお歯を食い縛って我慢していくのが、忍耐というものでしょう。

以下、円了がいかに忍耐ということを強調しているか、その例を二、三、掲げておきましょう。

忍耐の舟にさおさして立身の海を渡る、成功の馬にむちうちて成功の山に登る。忍に内外有り、内忍はもって心を制し、外忍はもって事を裁く。わが心は刀のごとし、その利なること百難を断つ。わが腕は鉄のごとく、その堅きこと万難に耐う。勉強と忍耐とはよく寸陰を変じて尺金となる、また赤土を練りて黄金と化す。百戦百勝は一の忍耐にしかず、万言万当は一の誠実にしかず。倹の薬は貧病を医し、忍の力は情魔を断つ。わかき時もし荒怠せば、老後の悔いかん。意馬ひとたびむちうちて去り、身をおどらし敵中に入る。刀を代えて忍耐をふるい、奮闘して成功をみる。向上の路いずれのところぞ。雲深くして関を見ず、おもむろに行きてつとめてやまず、認め得たり成功の山。（同前、三三六～三三七頁）

ここにある「勉強」とは、いわゆる学習のことではなくて、できそうもなくてもあえて「勉め強いて」行うということです。別の言葉で言えば、努力精進ということです。忍耐と誠実、そして倹約が、人生の成功の鍵であると言っています。

忍耐の刀は艱難の路を排し、倹約の薬は貧苦の病を除く。

立身の要道は忍耐に在り、成功の秘訣は忠実に在り、公徳は本これ富強の礎、忍耐はおのずから繁栄の柱となる。

辛抱の棒で怠惰の鬼を打て

人生の荷物をかつぐ天秤は、ただ辛抱の一棒と知れ（以上、同前、三三六頁）

一時の僥倖を望むよりは、むしろ心常に楽しむを期せよ。人心あるいは暗あり、良心ときに光を放つ。暗夜の灯台のごとく、霧海の磁針に似たり。人生の海を渡るもの、この心に照して進み、正直を守りて行かば、必ずや目的地に達せん。ときにあるいは失敗する有るも、一時の後に必ず成る。百の銅鉄ありといえども、一の黄金にしかず。百の計術ありといえども、一の正直にしかず。正直の左右には、勤倹ありてこれにしたがう。勤ならず倹

ならざるものは、不正直より起こり、富貴利達するものは、勤倹の招致するところ。身を守るに勤倹をもってすれば、なんぞ身の立たざるあらん。家を治むるに勤倹をもってすれば、なんぞ家の興らざるあらん。勤倹は忍耐を要す。忍耐はその本となる。正を守りて動ぜず。艱苦を排して進む。百たび折するも撓ざるものは、まことにこれ忍耐たり。忍なく耐えるなきものは、人の身の骨なきごとく、骨なければ足立たざるなり。（「明治実語教」、同前、三九四頁）

ここでも、正直と勤倹とが大事であると強調しています。勤は精進、倹は倹約です。これらの根本は、忍耐だとも指摘しています。「百たび折するも撓ざるものは、まことにこれ忍耐たり」とある言葉には、私も感銘を深くするものですが、同時にどこか円了自身の実感がにじみ出ています。円了も数々の苦難（台風による完成間近の校舎の倒壊、哲学館事件という文部省の不当な弾圧、延焼による校舎の消失等々）に遭遇し、そのたびに達観の内にそれらを乗り越えてきたのでした。

次は、有名な「徳川家康の遺訓」を改作したものです。

人の一生は重荷を負うて、遠き路を行くがごとし、倦怠すべからず。百難の道に横たわるあらば、排除して進むべし。心に成功を期して奮闘せよ。たとえ失敗するも、落胆するなかれ。最後の勝利は、堅忍不撓の人に帰すべし。憤怒は立身の基、小憤を捨てて大怒をとれ。災害はかえって刺激剤となる。国のため世のためには、己の力のあらん限りを尽くせ。たおるるまで活動するこそ、吾人の本分なれ。善事にあたりては師に譲るな、過ぎたるは及ばざるに勝れり。（同前、三三九頁）

（六）人生七十、なお青年

私は、東洋大学の学長を退任すると同時に、東洋大学も退職しました。あとは余生で、いかに楽しく過ごそうかという時期に入ってきましたが、円了は老後はあまり活動せず、穏やかに過ごそうなどとは考えもしなかったようです。おそらく、生涯、現役をめざしていたことでしょう。そういう円了の生き方に接しますと、私もぼやぼやしている場合ではないぞと思わずにはいられません。

かつてアメリカのロサンゼルスに四か月、滞在したことがありましたが、そこで非常に感心したのは、自分はもう年だからということを言う人は誰もいなかったことです。老人になってからでも、これからサンスクリット語を修得するのだとか、皆さんとても前向きでした。日本人はとかく老齢になると隠居したいということになりがちですが、円了は違いました。生涯、青年のつもりでいる、と高らかに宣言しています。以下の言葉をご覧ください。

つまり人生は楽観して奮闘すべき舞台である。決して万事を悲観して光陰を徒消すべきものでない。諺に「運は寝て待て」というは、大いなる心得違いである。「運は練って待て」、またウント働いて待たなければならぬ。これにつきても余のよみたる句がある。

生きている間にウント働きて、死んでユックリ休め世の人
運々と空しく運を待つよりも、ウント勇みてウント働け
朝寝するなら死んで後、仕事するなら若いとき

よって余は人生七十なお青年と唱え、生涯青年の心得で活動せざるべからずとの主義である。また十六丁主義および三十二丁主義を唱えている。十六丁主義とは口も八丁、手も八丁、合わせてみれば十六丁である。もしこれに目も八丁、足も八丁を加うれば三十二丁となる。けだし吾人は人生は夢にあらずと心得、社会はわが活動の舞

台、奮闘の戦場と承知し、極力活動奮闘するをもって人生の本務、吾人の天職としなければならぬ。（同前、三一六～三一七頁）

余は今すでに白髪の老翁となりたるも、心はなお青年のつもりにて自ら口に奮闘活動主義を唱うるのみならず、実際において自彊不息である。いわゆる十六丁主義、三十二丁主義を実行している。その自ら実行している有様を語に作り詩に賦して人に示し、ことに青年に与えて奮闘を勧めている次第である。

笑うに堪えたり世間白頭を嘆くを、わが生、老後も未だかつて休まず、堂々たる意気だれかよく圧せん、一喝まさに呑まんとする五大州。

東に去り西に来る、知りぬ幾年ぞ、壮心一片、老いてますます堅し、微力なるもいささか皇運をたすけんと欲す、はるかに上る南洋万里の船。（同前、三一八頁）

以上、老いてもなお大変な意気ですね。口八丁・手八丁に、さらに目八丁・足八丁も加えるという、三十二丁主義とは傑作です。死ぬ間際まで、はたらいて、はたらいて、はたらき抜いて、そして死んでからゆっくり休むというのが、円了の人生観でした。

特に老境に入ってきた私としては、以上のような円了の言葉には、あらためて勇気づけられます。

これまでのお話で、皆さんも元気をもらえたでしょうか。

なお、前の文にあった「けだし吾人は人生は夢にあらずと心得」ということに関しまして、よく禅僧などが「人生は夢のごとし」等と言うわけですが、円了は、すべてを夢と言えばニヒリズムになってしまうと、そのことを警戒していました。そこで円了は、たとえば『仏教心理学』における第七講の「第二段　夢の解釈」を、次の言葉をもって結んでいます。いかにも活動主義を自らの哲学の帰結とした円了らしい結論です。

故に余は、人生を夢幻視すると同時に、人生を現実視せんことを望む。これを夢幻視するは消極的方面の観察にして、これを現実視するは積極的方面の観察なり。両方面の観察あい待ちて、始めて転迷開悟の要道を説くべし。けだし余は仏教の有空中の三段の妙理はここにありて存するを知る。これを要するに、およそ我人の人間界を観察するに、初めに消極観を起こして、世上万事夢のごとく幻のごとく、一切みな妄仮無実と払い去り、生老病死の苦厄、天災人災の患難も、またみな夢中の妄境と観じきたり、後に積極観を起こしてこの世界、この人間は元来、真如より開発したるものなれば、われも人もみな真如の化身分体にして、その見るところの諸象も、そのおるところの諸境も、みな現実にして虚妄にあらず、いわゆる即身是仏、此土寂光と悟達せざるべからず。ああ、我人は無始時来、生死露頭の迷人なると同時に、久遠劫来、涅槃界裏の真人なりとは、あに不思議中の不思議にあらずや。これ実に哲理の妙致、宗教の玄旨なれば、よろしく深く味わいて感得すべし。(『選集』第一〇巻、一〇九頁)

おわりに

最後に、非常に興味深いエピソードが報告されていますので、それをご紹介して私のお話を閉じさせていただきます。それは、次のような話です。

円了は、あるとき、信州に遊んだことがあったそうで、その折り、嶮しい山路を上っていて、渓流の中央に一つの大きな岩石があるのを見ました。そこで円了は、このような大きな巌(いわお)は、どんな洪水でも流されまいというと、案内者は、いえ洪水のたびにだんだん上にあがっていくのです、と答えました。円了はそんなばかなことがあるものかと

思ったのですが、案内者はそのことについて次のように説明したとのことです。

「洪水のとき、激流が上のほうよりこの岩を打って来る。そのとき、この大岩の底にあたっておる泥や小石は、上のほうから取り去られるゆえ、この大岩は上のほうへころりと転ずる。かような具合で、だんだん大岩は上のほうへのぼるのである。この大岩も先年までは、もっと下のほうにあったのだけれども、この前の洪水の折りにここまでのぼったのである。」

この話を聞いて、円了は次のように思ったそうです。「ほかの小石や泥は、逆流に対すればみな流されてしまうのに、大岩のみは漸次に上にのぼるというは、味あることではないか。男児、よろしくこの大岩のごとき確固不抜の大盤石心を持たねばならぬ。逆流に対すれば小石は流れる。逆運に対すれば常人は萎縮する。けれども大丈夫たるものは、逆境が多くなればなるほど、逆運がはげしくなればなるほど、いよいよますます奮って進まねばならぬ。」

円了はこの話自体も他の人びとに話したようで、それを書にしたためてほしいとの依頼を受け、次の句を作って書いたのでした。「大石は逆流にさかのぼり、大人は逆運に上る。」（「わが決心を固めたる教訓」、『甫水論集』、『選集』第二五巻、三一二～三一三頁）

皆さんも日々の生活の中で、時に逆境というような事態に出会うこともあるでしょう。そのとき、忍耐の心のもとに、けっして負けてしまうことなく、そのことを契機にかえって人間的に成長してより大きな人間になっていただきたいと思います。皆さんのご健闘を心よりお祈りしています。

以上で、本日の私のお話を終えさせていただきます。ご清聴、どうも有難うございました。

（編者付記）本稿は、令和三年（二〇二一）四月十七日の大倉山講演会における「井上円了の活動主義について」（横

浜市大倉山記念館ホール）と題する講演録に、加筆修正を加えて成稿していただいたものである。

参考文献

竹村牧男『井上円了　その哲学・思想』（春秋社、二〇一七年）